第２５回京都文化芸術都市創生審議会　摘録

日　　時　令和６年１２月１９日（木）　午後３時３０分～午後５時３０分

場　　所　京都市役所　本庁舎４階「正庁の間」

出席委員　池坊専好会長、青木淳委員、池内奏音委員、太下義之委員、大原千鶴委員、
岡村詩野委員、奥山理子委員、坂本公成委員、建畠晢委員、細見良行委員、
松本邦子委員、屋敷陽太郎委員、山極壽一委員、吉田良比呂委員、渡邉裕史委員

事 務 局　山本ひとみ文化芸術政策監、平賀徹也文化芸術都市推進室長、
吉岡久美子京都芸大・文化連携推進部長、小林中美術館担当部長、
猿渡毅文化財担当部長、松本守弘担当部長、森貴之担当部長ほか

１　開会

２　議事

（１）本市の文化政策の方向性と取組について

（２）令和６年度主査制度「京都芸術センター」について

３　閉会

※　各委員等からの発言要旨は別紙のとおり

２　議事

（１）本市の文化政策の方向性と取組について

吉田委員

現在京都市では、新京都戦略を策定しているところでもあり、本日の御議論に当たり、特に御意見をいただきたいこととして、

①　「伝統文化・音楽・アートなど多様な文化に誰もが触れる機会の創出について」

②　「文化の担い手や支え手の育成・支援について」

③　「国内外のクリエイティブ人材の呼び込み、受入環境の構築について」

④　「文化遺産の保存と活用の好循環の創出について」

の、４点を挙げさせていただく。文化政策全体のほか、これら四つの課題についても御議論の中で触れていただき、御意見をいただければ幸いである。

渡邉委員

・　「ようこそアーティスト」事業によって、令和５年度は4,000名の子供たちに文化体験を届けるなど、多様な分野の芸術家の方が活躍しているのが京都市の特徴だ。そうした体験機会の創出をしていることは素晴らしい。子どもたちがプロに触れる機会を今後も継続してほしい。

・　私自身もアートマネジメントやワークショップのコーディネート等を行っているが、現場の感覚として、最初は「どんなことをやるのか」と不安そうな顔をしている子どもたちが、体験の時間が終わった後、「もっとやりたい」という反応を示してくれていると間近で感じることがある。

・　アーティストにとっても、１回だけではなく複数回の体験があると、より深く伝えることができる。また、体験行事を毎年の定期的なイベントにすることで、子どもたちが「次の学年になったらこんなことができる」と思え、文化に触れることについて、わくわく感を持ってもらえるのではないか。そうして、連続的あるいは定期的な体験行事が、教育現場の中で行われると、誰もが本物を等しく体験できる機会が増える。音楽、美術、図画工作や総合学習など様々な切り口でアーティストが入れれば、学校の先生の負担も減り子どもたちの体験の度合いも増える。文化に触れることで、京都にはいろんな文化があるのだということを知ってもらう機会にもなるので、広がっていくとよいと考える。

坂本委員

・　私は、舞台芸術やコンテンポラリーダンスに関して長らく育成に携わっている。京都芸術センターが開設され、創作の場が充実し、ロームシアター京都のリニューアルや民間ではTHEATRE E9 KYOTOの開設によって発表の場の整備も進んでいる。

・　しかしながら、作り手は減少している。少子高齢化の影響なのか、京都の文化的な魅力が減少していることによるものなのかは判然としないが、明らかに、才能のある若手が関東方面に移住してしまう。関西では、大阪や兵庫から若手が京都に移住するというケースもあり、

一定の吸引力を持っていると思うのだが、関東と比べるとやはり吸引力が弱い。

- 「京都に魅力を感じ、住んで、創作し、発表していきたい。世界へつなげたい。」という若手を育てるなら、京都市立芸術大学に舞台芸術学科がないというのが、やはり致命的である。下から盛り上がっていく層がないということだ。
- 舞台芸術学科は一見、狭いジャンルに思われるかもしれないが、音楽や身体に関する要素もある総合芸術である。舞台芸術が活気を持てば、他の分野も豊かになっていく。
- 海外での活動を通じて、フェスティバルをやれば吸引力があることを実感している。KEX など、京都は外に向けた発信をできているものの、地元から作品を生み出して発信していく力が、今後どうなっていくのかには危惧を感じている。京都芸大に学科を作るだけでも、すごく大きな効果が出てくるだろう。

池坊会長

- 私も先日 E9 に行ってきた。小劇場ならではの熱気と距離の近さに魅力を感じた。役者の方々の苦労もお聞きした。

池内委員

- クラシック音楽の世界でも、若手はみんな関東・東京に流れてしまう。京都市立芸術大学があって、学部、大学院まで学んでも、その後は関東に行く。芸術は学び続けることが大事だが、京都には、音楽の世界で卒業後に学べるところが少ない。私自身もそう感じるし、友人たちからもそういった話を聞く。
- 京都には、アートや伝統芸能など魅力的なところがあり京都でしか学べないことはたくさんあるはずだが、音楽の世界ではなかなか活かしきれていないと感じる。京都でしかできない強みを持って、ワークショップなど、新しく作り出せる環境ができるとよいと思う。
- さらに、関東でも実現されていない新しいものを京都で発信し、それを京都の魅力にしてしまう、ということもできるのではと思う。

青木委員

- 京都の中で既に存在している活動は非常に多く、ある意味で多過ぎるほどだ。しかしそれを連携していく仕組みが弱いと感じる。京都市立芸術大学が掲げる「テラス」というのは、非常に重要。集いやつながりが生まれ、交わりあう場として大学を考えるということだと思う。美術館でもそういうことができるのではないか。全ての分野では無理かもしれないが、少なくとも美術の分野ではできると思うし、連携の結節点となりえる。京都市京セラ美術館ではそういう活動ができていないのが悩ましいところ。
- 連携するためには、人手が必要。そういう人がいることによって、場が活性化される。色々なプロジェクトを連携していくための場を作ること、予算、手法について強化していくことが大切だ。

建畠委員

- 京都コンサートホールができ、ロームシアター京都、京都市京セラ美術館が改装、京都市

立芸術大学・文化庁の移転など、ハード面や制度面での充実は、日本の都市でも珍しい。それぞれが活動をしているが、確かに横の連携ということになると、弱い。そこをつなぐ役割やイベント等を考えるべきで、京都芸術センターでは美術館と何かできないかと思っている。

- センターはオールジャンル。若いコーディネーターがいて制作等をしている。キュレーターやプロデューサーを養成すると同時に世に送りだす。有効に機能させるべきと考えている。
- センターではアーティスト・イン・レジデンスの取組があるが、規模が縮小しており、以前は年に５人くらい受け入れていたが、現在、１人しか受け入れられていない。海外から招聘して、京都市に住んでいただいて、コーディネーターとともにリサーチ等を行い、最終的に発表までするというもの。大規模な施設は必要なく、センターで制作の場は提供できるので、こういった取組を是非強化して活用していきたい。
- アートフェアについて、日本では東京現代などがあるが、香港、ソウル、マイアミ、バーゼルに比べても、規模が一桁小さい。ニューヨークやロンドン、パリでも開催されているが、地方都市である京都は観光の魅力もある。大きな場所が必要という問題があるが、京都でも開催してほしい。文化庁も関わっているようだが、作品が免税される保税地域のシステムが整えば、求心力が上がるだろう。
- また、エディンバラ・フェスティバルというものがある。スコットランドで毎年開催される非常に大きな求心力を持った総合芸術祭であるが、こういったものを京都で開催できないか。二条城や五つの文化施設とで連携すれば実現できるのではないか。
- 京都には六つの美術大学があるが、音楽は京都市立芸術大学、演劇は京都芸術大学など非常に偏りがある。京都市立芸術大学には翼を広げていただきたい。また、文化遺産の修復専門の課程が京都市立芸術大学にない。日本画の一部で部分的にやってはいるが、京都にこそ、修復の専門家がいるので、連携しながら修復の課程を作るなど、今あるインフラを拡大することで、それほど大きな投資をしなくても実現できるのではないか。

太下委員

- ３点具体的な提案をしたい。
- ④については、2021 年に文化財保護法が大きく改正され、それを踏まえての論点とお見受けする。京都市内に多数の国宝・重要文化財などがあるが、これらをしっかり保存し、適切な活用をしていくうえで、企業サポーターというような制度を作れないだろうか。簡単に言えば、企業メセナであり、企業版ふるさと納税の制度と組み合わせると、例えば「この文化財は我が社が支援しています」ということが言え、企業にとってもよい PR になる。ふるさと納税と組み合わせることで、京都市の政策に反映できるので、可能性も含めて御検討いただきたい。
- ２点目は、ナイトカルチャーについて。ナイトカルチャーは非常に重要と認識しており、訪日外国人にアンケートをとると、夜にやることがなく、食事後は居酒屋かカラオケしかないという回答。せっかく京都にお越しいただいたからには、ナイトカルチャーを、と思う。オーバーツーリズムに対するタイムシフト効果も期待できるのではないか。ナイトカルチャ

ーを推進しようとしている都市は世界中にあり、比較的共通する制度としては、ナイトメイヤー（夜の市長）を選任するというのがある。ニューヨークは行政職だったと思うが、本当の市長ではなく、プロデューサーやディレクター、コーディネーターというポスト。アムステルダムでは、行政とは直接関係ない民間の事業としてナイトメイヤーがいる。夜のナイトカルチャーを推進しようとすると、アルコールや深夜営業、風営法的な問題など、従来の行政が踏み入りがたい分野とうまくやっていかなければならならず、騒音やごみの問題なども解消していかないといけない。そういうことを調整するポジションやチームとして設置している。多くの都市は、このナイトメイヤーを設置しているので、京都市もぜひ設置を検討いただきたい。

・　３点目は次の議題の際に申し上げる。

山極委員

・　京都は税金が高い。パリやベルリンを見ると、最近は落ちてきたけれど、アーティストは優遇されている。アーティスト・イン・レジデンスを進めるなど、外国人でなくてもアーティストが京都に住むために、お金の給付でなく、税金の免除や割引、何らかのインセンティブを与えるということをしていただきたい。１年間に１回発表するのが義務で、発表する場所と制作する場所というものが十分に与えられて生活保障がある程度できればよいと思う。まず、アーティストは食っていけず、学校の先生やアルバイトなどをやっていないと、税金の高い都市には住めない。何らかのインセンティブを工夫して与えていった方がいい。

・　鑑賞する立場から言うと、「これと、これとこれがつながっている」という視点が欲しい。メニューを情報として SNS でも発信する。それにより交通機関などの割引制度があるといったインセンティブを与えると、京都に初めてくる人、あるいはリピーターも「では次はこれをやってみようか」となる。

・　京都はたくさん活動があり、とても見切れないし訪問できないが、目利きの人が「こういうコースがある」と紹介してもらえれば、それに従って鑑賞する人は多いと思う。特に外国人。最近は欧米の人も多いが、もちろん自分の好みで選んで結構なのだが、それにプラスして、このコースを辿るとこんな喜び・学びが得られる、そして割引も得られる、といったセットで提供するものがあればと思う。

・　以前から暦がないと言っている。この日にどういうイベントが京都で開かれていて、その地理的条件や時間など、相当調べないとわからない。それがつながって見えるような情報提供ができれば、オーバーツーリズムの解決にもつながるかもしれない。情報の工夫と割引等のインセンティブの追加で、人の流れはずいぶん変わると思う。ぜひ企画としてやっていただきたい。

池坊会長

・　京都が選ばれる都市となって、アーティストにとっても次の創造のモチベーションが掻き立てられるような仕組みや、イベントに関しても市民に情報がしっかりと届いているかということも課題と感じた。

岡村委員

- 音楽は京都精華大学にも授業がある。
- 本日最も御相談したいことは、山極先生がおっしゃった件。私は、京都で小学校から高校まで過ごした後、東京に移り、京都に戻ってきて10年以上経つが、10年程前に市の文化芸術企画課に、イベントカレンダーを作りたいと伝えた。今日は、何がどこで行われているのか、どういったルートで行けば辿り着くのか、複雑なバス系統など、ツール・ルートを提示したうえで、「今日は、こことここにこの時間であれば、はしごができる。その後、この店に行けば食事ができる。夜の時間も遊べる」など、いくつかのルートを御提案・キュレーションするというのを一日一日全部やっていくべきと思っている。
- 海外のミュージシャンなど、ライブで京都に訪れる人は多数いるが、前乗りした晩や自分の出番が終わった後に何かライブはないか、という相談を国の偏りなく非常に多く受けるが、それぞれのライブハウスのページを見るしかなく、そこへどうやったら行けるのかもはっきりわからない。
- 本日、山極先生をはじめ、たくさんの意見が出ており、多くのイベントがある中で、京都のウェブサイトの中にも一望できるものがないことは、非常に大きな問題だとかねてより思っている。以前から私にやらせてもらえないかと提案していたが、一向にやらせていただけないまま10年以上経っている。何とかさせていただけないかと提案する。
- そのためには、皆様のお力が必要で、どこに行けばよいかに留まらず、食事や宿泊施設、買い物ができる場所なども含めて、1人の人間では絶対にできない。私の専門領域は音楽だが、私だけではできず、多くのマンパワーが必要。10年以上前、文化事業の方にこのことを申し上げると、マンパワーも予算もないと言われた。
- 今に至るまで、状況は改善されないどころか、イベント等が増え選択肢が複雑になっている。SNSやウェブサイトなどで情報をまとめることが急務だと考える。京都市の既存アカウントでは、そうしたライトな、観光客向けの発信をしてもキャッチしてもらえないと思うので、新たにカルチャー面のアカウントを作ったうえで、1日に1本だけでも時間に応じたタイミングで発信する流れをとって、初めて京都に来た人でも、どういったルートで辿り着けばよいのかリアルタイムでわかるように形にしてもらいたい。

池坊会長

- 確かに人の行動は簡単ではなく、見る・食べる・休む、全てが連動している。行くところがないということもあるので、関連付けて御案内できればよい。

山極委員

- AIが使えるので、情報さえ集められれば、割と簡単にできるのでは。

大原委員

- 飲食店も、どこでどのようなイベントが行われているのかという情報があれば、それに合わせた営業の仕方もできると思う。
- 子どもが京都芸大でお世話になっているが、卒業後に食べていけるのか、就職できるのか、

どうやって生きていくのかというのを本人も不安に思っており、親もどういうアドバイスをしてよいかわからない。周りの友人も見ていると、材料費も高く、食費もかかり、住むのも大変で、貧しい暮らしをしている人もいる。年に１回か２回、発表をし続けることで、ある程度のレベルの活動をしている人に対して、アーティストパスポートのようなものを発行できないか。空き家対策で多少不便な所でも住むことができる、家賃補助がある、買い物でもちょっとした割引があるとか、そういう小さなことでもできるようになったらよい。それを、ふるさと納税で応援するというような制度があればよいなと思っている。

・　物を作る若手たちは、売る場所や発表する場所がなくて、SNS なども膨大な数。どう発信してよいかと困っている。鴨川で音楽やダンスをしている人たちもいるが、そこにもっとベンチがあって、看板があって、作品の写真を載せられなくても QR コードがあるなどすれば、情報にアクセスし、繋がることができる。椅子に座ってコーヒーを飲むといった気持ちが豊かになったときにいろいろ知りたいという方もいらっしゃると思う。小さいことではあるのだが、そのようなことができればよい。

坂本委員

・　イベントや、夜の文化事業など、アートに触れられるサイトがあればというのは、海外の方からもよく言われるので、本当にあればよいと思う。

・　アーティストとしては、他の面白いアーティストに出会いたい。先ほど学ぶ機会を設けることが大事という話があったが、アーティスト同士の出会いがあって、互いに切磋琢磨しあう環境があることを魅力に感じ、京都にとどまっているアーティストをたくさん知っている。人と人の出会いというソフト面を強化できるような、アーティストにとっての出会いの機会を後押しできるような仕組みができないかと思った。

・　京都は、海外のアーティストから見ても魅力のある都市。関西日仏学館が、アーティスト・イン・レジデンス「ヴィラ九条山」を作っている。そこに来るアーティストたちは、京都の伝統工芸や現代美術のアーティストに関心を持ってくれている。ドイツのヴィラ鴨川、日本イタリア会館もある。こういった都市は、東京以外では京都しかない。ましてや、フランスのアーティスト・イン・レジデンスは京都にしかない。海外の出先機関の人々も、日本の、特に京都のアーティストとの出会いの機会を求めている。そのような国内外のアーティストがここを訪ねたら面白い人と出会えるという器ができないかと思う。

山極委員

・　大阪関西国際芸術祭というものにも関わっている。大きな会場にブース展示をするもの。アジアやヨーロッパの作家たちが集まり、作品を解説して交流し、オンライン配信でバイヤーを決めるということを、この２年間ぐらい大阪で実験的にやってきたが、なかなか面白い。先日、京都国際会館の理事会でそのようなことを自主的にやったらどうかと提案した。大きな会場が、国際会議場にはあるので、作家が自主的に自分の作品を展示して、オンライン配信もし、作家たちがお互いに交流できるという機会を作る。日本は作品を売ることが下手で、京都の人たちも抵抗を感じていると思うが、国際的にみればそれは大きな市場である。そういったことをしてもよい時代になっていると思う。

細見委員

- ①に関連して、外国で当たり前で、日本で行われていないこととして、欧米でも東南アジアでも、美術館には必ず子どもたちが来ていて、作品を前に先生が説明をしている。日本では、これはあり得ないことだが、私は「なぜしないのか」と言い続けている。音楽では、音楽鑑賞というカリキュラムがあるので、皆が音楽を聴ける。一方、美術では、少しよくはなったが、芸術鑑賞というプログラムがないので一生涯絵を見ない人がいる。日本では、美術鑑賞を取り入れてこなかったため、その先に学生を連れて先生が美術館に来られるということが、行われていない状況がある。
- 京都市に対しても、細見美術館で休館日など、貸し切りで開放すると提案をしたが、全くなされていない。ましてや、コロナ禍を経て、さらに美術館では静かに見るもの、というものが日本で定着してしまい、少しでも話をすると周囲のお客さんに怒られる。仲間と一緒に作品を見て、学芸同士でも話をするものだが、話をすると怒られる。
- さらに、美術館で問題になっていることとして、鑑賞客同士が「うるさい」と喧嘩になるということがある。とても困っている。こうなるとますます、学生を連れてきて展示を見ながら説明することができない現状。何とか解決策がないか。
- 深刻な問題で、美術館で静かに見ているのは、世界中で日本だけ。

青木委員

- それは当美術館でも問題意識を持っている。京都市京セラ美術館でやろうと思っているのが、好きな形で鑑賞してよいという日を設けるということだ。出来ればその日は無料にする。そのことによって、「うるさい」と思っても、無料の日なので文句は言いにくい。まずは美術館に来てもらう機会を作り、そこからスタートしていくのが必要かと考える。そうしていく間にだんだんとそのような日を増やしていくという方法があるのではないか。この点は、大きな問題。

渡邉委員

- 舞台芸術も喋りながら見るというのが難しく、静かに見ることを求められる環境。
- ②の文脈で言えば、今まで舞台を見てきた人が、親世代・子育て世代になってくる。作り手にも同じことが言える。となると、子どもを連れて見に行けるものとできないものが出てくる。多くの小劇場では、託児できる場所を確保するのは難しく、一緒に会場に入っても、静かに見ることを求められるので、ゆっくり見られない。そこに対して、この回を無料で入れますということをしたり、託児の部屋を借りたりするなど、主催側がただでさえ赤字のところ、さらに負担をしてやらないと、子育て世代が舞台芸術から離れ、見る機会が失われる。
- このように、主催者側が費用負担をしなければならない状況で、やりたいと思ってもできない環境になっている。子育て世代・親世代が見に来やすい環境を作る、託児に対しての支援やサービスなどが広がれば、やりたいアーティストはたくさんいる。そのような支援ができる仕組みがあればよいと思う。

松本委員

- 行政の事業は大前提として、市民の税金を使って行うため、何にどう使われているのか市民にはっきり見えないといけない。文化は見えにくくて、高いのか低いのかと指数で見えるわけではないので、市民の方々一人一人が肌で感じることだろうと思う。
- 例えば①は、小中学生が茶道や華道に触れる時間があるなど非常にわかりやすいが、②や③は、身近にアーティストの方がいてもわからない。市民の方が見えないというのが寂しい。知っていたら、市民の方からも理解を得られ応援してくれることもある。そのため、市民に文化に関する取組をやっていることをより広く知っていただくことが必要だと思った。
- 外国から色々な方を呼んでくるということは、素晴らしいこと。まちを歩いていると、姿勢や雰囲気で「あの人はアーティストだ」とわかることがある。そのような人が周りにたくさんいると、文化という意識がないかもしれないが、生活の潤い・新しい視点をいただけるということが、豊かな日常生活につながるのではないか。
- また、伝統文化がかなり厳しくなってきており、国立劇場改修の件のように、発表する場がないことが問題になっている。京都は伝統芸能に携わる方がまだまだいらっしゃって、そういう人たちが困窮しないよう、発表の場が一番大切。発表の場があることで、お稽古にも力が入る。
- せっかくならば、前衛的な人と古典分野の人の出会いの舞台なども見てみたいと思う。

池坊会長

- 体感治安という言葉があるが、体感文化芸術とでも言おうか。充実度や認知度など一般の方の理解や感じていただける環境づくりというのが大事である。
- 伝統文化・芸能では、生け花でもそれだけでは生きていけないという状況の中で、需要を作ることが仕事であり、その一方で、働き方にはいろんな構成がある。副業なども絡めながら、断念しないで続けていける環境があればと思う。

奥山委員

- 同業者の情報がシェアされにくいというのは課題だと私も感じている。私が携わっている福祉や共生社会という分野は、取組が長く続いているとは言いがたい小さな領域だが、そこで自分は新しいと思って何かに取り組んでいても、非常に近いところで似たことを調査していたり、アウトプットしていたりということが起こる。
- 実践者が同じことを悩んでいるのにお互いに知りえなかったがために、共通の課題をシェアできずに、取組がただ消え行ってしまうということも少なくない。
- みずのき美術館ができ 12 年が経つが、そういった課題や悩みが、この間で変化しているかというと、そうではなく、今も同じことで悩んでいる現状がある。どのように障害のある人達の表現を支えればよいのか、病院や福祉施設、家族中で協力者がいない、どうやって販売につなげるかなどの基本的なところでずっと悩んでいる。プラットフォームのようなものの設置や、一元的に情報が集まり発信できる方法を作ることも必要だろうかと思っている。
- 一方で、すでにプラットフォームづくりもいろんなところでされている。厚労省では、障害のある人の文化芸術活動に関する相談窓口を各自治体に設置する取組も進んでいるが、本

当の意味での情報がなかなか一元化されていかないことの、根本的な課題は何かということを考えずにはおられない。

・　一つの課題として、行政の事業だと単年度で成果を出さないといけないというのが大きなネックである。１年で関係をつくり、調査して、成果を出すというのは、分野によっては非常に過酷。極めるに至らないまま、ひとまず派手にイベントをしようということになってしまい、萌芽としてはよかったが、できたものはまだまだ甘く、継続に至らなかったというケースがある。単年度で急き立てられながら成果を出すことが求められる状況で、新規事業であれば特に、極めるまでに至らず、表層的なところで終わってしまうということがある。なんとか違う時間軸や違う方法で、深めていける体制をとっていければよいと切に願う。

建畠委員

・　情報のことで言えば、過去にはエルマガジンなど、情報を一元化した雑誌や冊子があったが、なくなってしまった。ニューヨークやパリなど海外でも同じ。今は、オンラインに情報はたくさんあり、自分の専門的なところは可能かもしれないが、メディアリテラシーがないと、欲しい情報にアクセスできない。ましてや海外から来た人、旅行者はなおさらである。

・　この対策を行政が行うべきなのかまではわからない。

・　京都市では、HAPS という取組があり、努力している。京都の町家など、空き家にするのではなく、安い値段でアーティストに貸すということを頑張っている。これがもっと発展していけばいいと思っている。ただこれは場所の話で、生活はどうするのか、発表の場所はどうするのかという色々な要素が絡み合う。改善の余地ありだが、努力している人たちはいる。発展していけば、京都はもっと住みやすいまちになると思う。

屋敷委員

・　京都に転勤してきて間もなく半年になる。観光客気分で本当に楽しい毎日を過ごしており、皆様にも温かくしていただき嬉しく思っている。色々なイベントに行った中で、心に残っているのが、京都市の OB の方に御紹介いただいた「京都西山竹あかり」というもの。西山の三つのお寺でのライトアップで、夜の時間に観光客を分散する取組。アテンドもいただいたが、会場の所在地は長岡京市。京都市だけではなく他の地域とも連携して、取り組まれており、懐が深く、素晴らしいと思った。

・　大河ドラマ「光る君へ」は、おかげさまで大成功を収めた。ドラマを見てアジアを含め全国から多くの方に来ていただいているが、そのような方から見ると、京都市か、宇治市か、あるいは大津市かといったことは関係ない。なおかつ、市のイベントなのか、府のイベントなのかも関係なく、来る人を満足させてくれるいろんな伝統文化が京都にあることが素晴らしいと思う。これまで以上に京都市には、面的な広がりで、京都ブランドで周りにも波及効果を及ぼしていっていただけるとよい。

（２）令和６年度主査制度「京都芸術センター」について

太下委員（資料２に基づき説明）

・　今回の主査制度による調査は、池内委員、渡邉委員とともに、京都芸術センターを対象に行った。課題に関して、ある程度の部分は京都市の予算措置で解決できるので、改善をお願いしたい。
・　先ほどの論点の③（国内外のクリエイティブ人材の呼び込み、受入環境の構築）にダイレクトにかかわるのがレジデンスだが、この事業は非常に手間暇がかかるうえに、アーティストの受入れは成果が非常に見えづらい。京都市の文化的な懐の深さを示すことはできるが、それがどうなるのかが見えにくい。
・　一方で、レジデンスの本質はエクスチェンジにある。世界の都市との連携によって京都のアーティストを国際的に羽ばたかせる機能がある。この部分について、今後の強化を期待する。

建畠委員

・　今回のレポートでは、問題点を非常に的確に捉えている。センターとしても、京都市としても対応が必要。
・　センターは、魅力的な好立地にあるにもかかわらず、認知度が低い。制作の場であり、主な発表の場は別にあるので、縁の下の力持ち的存在。
・　アートコーディネーターが３年の任期制。世の中に人材を送り出すことを目的としており、実際にロームシアター京都や様々な美術館などで活躍している人もいる。人材養成機関の役割を果たす一方、不可避的に、よい条件があれば京都を離れてしまう。
・　特にレジデンスについては、拡大の方向で検討させていただきたい。ヴィラ九条山やヴィラ鴨川等との交流も進めていきたい。

吉田委員

・　京都市が気づかないところを調査していただいた。一般論で、指定管理期間が４年という短期間でいいのか。施設の性格によるところがあり、企画や育成などを行う場合は、明らかに長期間でないと生み出せないものがある。
・　文化芸術の分野に限らず、長期の指定管理期間で収益性を求める。京都市の財政負担を軽減させるという面もあるかもしれないが、企画・運営面で人材も必要で、処遇も考えることが持続可能性につながる。
・　御指摘の指定管理制度については、考えていかないといけないと改めて感じた。調査・研究を行っていきたい。

３　閉会

池坊会長

・　皆様から色々と御意見をいただいた。これを踏まえて、施策や運用に反映させていただきたい。

事務局（平賀文化芸術都市推進室長）

・　本日は貴重な御意見をいただき、御礼申し上げる。お示しした４点にいただいた御意見は、本市としても自覚しているところ。論点は四つであるが、全てが「人」で繋がっている。

・　文化に触れる機会の創出を支えるのはコーディネート人材等で、彼らの育成が必要。クリエイティブ人材の呼び込み・受入環境の構築に至っては、様々な御意見をいただいている。現状では、施設間をつなぐ仕組みもない。レジデンスの効果を市民にもお伝えしたい。若者と地域をつなぐ取組も必要。という意識で新しい取組も進めている。共通して、全て「人」が関係してくること。

・　文化遺産の保存・活用や、ファンドレイジングにおいても、所有者らとしっかりとコミュニケーションをとっていくことも「人」に関係する。リソースを確保することを行政がやるのか、民間の皆様がやるのか、協働か、どのような仕組みを作るのかに知恵を絞る必要があると強く感じた。

・　戦略を作っていく中で、皆様からの御意見を反映できるよう、検討してまいりたい。

（以上）